

太宰治 著 施小煒 譯

# 人間失格

日漢對照・精裝有聲版



香港中和出版有限公司  
[www.hkopenpage.com](http://www.hkopenpage.com)

## 目 録

はしがき 002                      楔子 003

だいいち しゅき  
第一の手記 010                      第一手記 011

だい に しゅき  
第二の手記 042                      第二手記 043

だいさん しゅき  
第三の手記 140                      第三手記 141

あとがき 266                      後記 267

## はしがき

わたし おとこ しやしん さんよう み  
私は、その男の写真を三葉、見たことがある。

いちよう おとこ ようねん じだい い  
一葉は、その男の、幼年時代、とも言うべきであろうか、  
じゅうさいぜん ご すいてい ころ しやしん こども おお  
十歳前後かと推定される頃の写真であって、その子供が大  
ぜい おんな と  
勢の女のひとに取りかこまれ、(それは、その子供の姉たち、  
いもうと い と こ そうぞう ていえん  
妹たち、それから、従姉妹たちかと想像される)庭園の  
いけ のほとりに、あらしま はかま た くび さんじゅうど  
池のほとりに、荒い縞の袴をはいて立ち、首を三十度ほ  
ひだり かたむ みにく わら しやしん みにく  
ど左に傾け、醜く笑っている写真である。醜く？けれ  
ども、鈍い人たち(つまり、美醜などに関心を持たぬ人たち)  
おもしろ なん な かお  
は、面白くも何とも無いような顔をして、

かわい ぼっ  
「可愛い坊ちゃんですね」

かげん せ じ い から せ じ きこ  
といい加減なお世辞を言っても、まんざら空お世辞に聞  
えないくらい、いわば通俗の「可愛らしさ」みたいな影  
こども えが お な  
もその子供の笑顔に無いわけではないのだが、しかし、い  
ささかでも、びしゅう つ くんれん へ き  
ささかでも、美醜に就いての訓練を経て来たひとなら、ひ  
み  
とめ見てすぐ、

こども  
「なんて、いやな子供だ」

すこぶ ふ かい つぶや けむし ほら とき  
と頗る不快そうに呟き、毛虫でも払いのける時のよう  
て  
な手つきで、その写真をほうり投げるかも知れない。

こども えが お み み なん  
まったく、その子供の笑顔は、よく見れば見るほど、何

## 楔子

我看過那男子的三幀照片。

一張大約應該說是那男子的幼年時代吧，可以推定是十歲前後的照片。照片中那孩子被眾多的女人團團包圍（可以想像這是那孩子的姐姐們、妹妹們，以及堂姐堂妹、表姐表妹們），身著寬條紋的褲子，立在庭院裡的水池畔，腦袋向左傾斜約三十度，醜陋地笑著。醜陋？然而倘若遲鈍的人們（即對美醜之類毫不關心的人們）皮笑肉不笑地來上一句不痛不癢的奉承話：

「多可愛的孩子呀！」

聽上去倒也並不完全像是不著邊際的亂拍馬屁——說來那孩子的笑臉中並非沒有通常人們所說的那種「可愛」的影子。但是只要稍微受過一丁點鑒別美醜訓練的人，一眼看去也許就會頗為不快地嘀咕：

「多討人厭的孩子！」

彷彿拂去一條毛毛蟲一般，慌忙將照片扔到一邊。

的確，越是仔細觀察，就越會不由自主地感覺到，那孩子

とも知れず、イヤな薄気味悪いものが感ぜられて来る。ど  
 だい、それは、笑顔でない。この子は、少しも笑ってはい  
 ないのだ。その証拠には、この子は、両方のこぶしを固  
 く握って立っている。人間は、こぶしを固く握りながら笑  
 えるものではないのである。猿だ。猿の笑顔だ。ただ、顔  
 に醜い皺を寄せているだけなのである。「皺くちや坊ちや  
 ん」とでも言いたくなるくらい、まことに奇妙な、そう  
 して、どこかけがらわしく、へんにひとをムカムカさせる  
 表情の写真であった。私はこれまで、こんな不思議な  
 表情の子供を見た事が、いちども無かった。

第二葉の写真の顔は、これはまた、びっくりするくらい  
 ひどく変貌していた。学生の姿である。高等学校時代の写  
 真か、大学時代の写真か、はっきりしないけれども、とに  
 かく、おそろしく美貌の学生である。しかし、これもまた、  
 不思議にも、生きている人間の感じはしなかった。学生服  
 を着て、胸のポケットから白いハンケチを覗かせ、籐椅子  
 に腰かけて足を組み、そして、やはり、笑っている。こ  
 んどの笑顔は、皺くちやの猿の笑いでなく、かなり巧みな  
 微笑になってはいるが、しかし、人間の笑いと、どこやら  
 違う。血の重さ、とでも言おうか、生命の渋さ、とでも言  
 おうか、そのような充実感は少しも無く、それこそ、鳥の  
 ようではなく、羽毛のように軽く、ただ白紙一枚、そうし  
 て、笑っている。つまり、一から十まで造り物の感じなの  
 である。キザと言っても足りない。軽薄と言っても足りない。

的笑容中有一種令人莫名生厭、毛骨悚然的東西。那其實根本不是笑臉，那孩子絲毫也沒有笑。證據是那孩子是緊握雙拳站在那裡的。人是無法在緊握拳頭的同時做出笑臉的。猴子。猴子的笑容。僅僅是在臉上堆出醜陋的皺紋而已。這委實是張奇妙的照片，不知何處總讓人感到某種猥褻的表情，令人作嘔。甚至想稱他為「皺紋滿面的寶寶」。迄今為止，表情如此奇特的孩童，我從未遇見過。

第二張照片上，孩子的臉變化之大也令人震驚。那是一副學生打扮，不清楚是高中時代還是大學時代的照片，總而言之，驚人地英俊瀟灑。然而，同樣令人驚異的是，感覺不出這是一個活人。他身著學生服，白色的手帕從胸前的衣袋中探出腦袋，坐在藤椅上，架著二郎腿，並且照例面帶笑容。這次的笑容不再是滿面皺紋的猴子的笑容了，而是相當巧妙的微笑，然而與人的微笑，又有某些不同。所謂血的分量吧，或者說生命的凝澀，總之是那種充實感，在此蕩然無存，這才是所謂輕似鴻毛，當然並非翩若驚鴻。僅僅是一張白紙，而且，是在笑。亦即是說，一切都充滿了虛假感。說是作態自不夠分量，說是輕薄又意猶未盡，說是娘娘腔亦未足達意，說是刻意修飾，自然也不夠窮形極狀。而且，仔細看去，在這英俊瀟灑的學生身上，仍然會感到某種類似志怪小說的令人毛骨悚然的氣氛。迄今為止，如此奇異的英俊青年，我尚未遇見過。

ニヤケと言っても足りない。おしゃれと言っても、もちろん足りない。しかも、よく見ていると、やはりこの美貌の学生にも、どこか怪談じみた気味悪いものが感ぜられて来るのである。私はこれまで、こんな不思議な美貌の青年を見た事が、いちども無かった。

もう一葉の写真は、最も奇怪なものである。まるでもう、としの頃がわからない。頭はいくぶん白髪のようにである。それが、ひどく汚い部屋（部屋の壁が三箇所ほど崩れ落ちているのが、その写真にハッキリ写っている）の片隅で、小さい火鉢に両手をかざし、こんどは笑っていない。どんな表情も無い。謂わば、坐って火鉢に両手をかざしながら、自然に死んでいるような、まことにいまわしい、不吉なおいのする写真であった。奇怪なのは、それだけでない。その写真には、わりに顔が大きく写っていたので、私は、つくづくその顔の構造を調べる事が出来たのであるが、額は平凡、額の皺も平凡、眉も平凡、眼も平凡、鼻も口も顎も、ああ、この顔には表情が無いばかりか、印象さえ無い。特徴が無いのだ。たとえば、私がこの写真を見て、眼をつぶる。既に私はこの顔を忘れていた。部屋の壁や、小さい火鉢は思い出す事が出来るけれども、その部屋の主人公の顔の印象は、ずっと霧消して、どうしても、何としても思い出せない。画にならない顔である。漫画にも何もならない顔である。眼をひらく。あ、こんな顔だったのか、思い出した、というようなよろこびさえ無い。極端な言い

另外一張照片最為奇怪。簡直弄不懂他究竟年齡幾何。頭上還似乎有了一部分白髮。這是一間骯髒不堪的房間（照片清晰地拍攝出牆壁上的三處倒塌壞損）的一隅，他雙手攏在小小的火鉢上，這次沒在笑。沒有任何表情。彷彿是雙手攏在火鉢上，端坐著自然死去了一般。真是一張散發著不祥氣息的照片。奇怪的事情尚不僅如此。這張照片面部拍攝得較大，因此我可以仔仔細細地加以審查。他額頭很平凡，額頭上的皺紋也很平凡，眉毛平凡，眼睛也很平凡，鼻子嘴巴下顎都很平凡，啊，這張面孔不僅沒有表情，甚至不給人留下任何印象，毫無特點。比如我看了照片後，雙眼一閉，便已忘卻了那張面孔。我能夠回憶起房內的牆壁，小小的火鉢，然而對這房間主人的尊容，卻雲散煙消印象全無，無論如何也回憶不出分毫。那是無法入畫的面容，甚至無法繪入漫畫。睜眼看去，也不會頓生意外之喜，歡呼道：「啊，是這張臉麼，想起來啦！」說得極端點，甚至正眼再看一遍照片，也回憶不起來。只會感到不快，焦灼不安，禁不住想將視線移開。

かた 方<sup>かた</sup>をすれば、め 眼<sup>め</sup>をひらいてそのしゃしん 写真<sup>しゃしん</sup>をふたたび 再び<sup>ふたたび</sup>見ても、おも 思い<sup>おも</sup>出<sup>だ</sup>せない。そうして、ただもうふゆかい 不愉快<sup>ふゆかい</sup>、イライラして、ついでにめ 眼<sup>め</sup>をそむけたくなる。

いわゆる しそう 所謂「死相」<sup>いわゆる しそう</sup>というものにだって、もっとなに ひょうじょう 何か表情<sup>なに ひょうじょう</sup>なりがあるものだろうに、にんげん 人間のからだにだぼくび 駄馬の首<sup>にんげん だぼくび</sup>でもくっつけたなら、こんなかんじのものになるであろうか、とにかく、どここという事<sup>こと</sup>なく、み 見る<sup>み</sup>者<sup>もの</sup>をして、ぞっとさせ、きもち 気持ち<sup>きもち</sup>にさせるのだ。わたし 私<sup>わたし</sup>はこれまで、こんなふしぎ 不思議<sup>ふしぎ</sup>なおとこ 男<sup>おとこ</sup>の顔<sup>かお</sup>を見た事<sup>こと</sup>が、やはり、いちどもな 無<sup>な</sup>かった。

便是所謂「死相」，也應當更有所表情，給人以更深一點的印象。倘使在人的軀體上安上駑馬的頭顱，其給人的感覺也許就是如此吧，總而言之，不知不覺會令觀者毛骨悚然，莫名厭惡。迄今為止，面容如此奇異的男子，我，同樣，從未見過。

## 第一の手記

恥はじの多いおお生涯しょうがいを送おくって来きました。

自分じぶんには、人間にんげんの生活せいかつというものが、見当けんとうつかないのです。自分じぶんは東北とうほくの田舎いなかに生うまれましたので、汽車きしやをはじめて見たのは、よほど大おおきくなってからでした。自分じぶんは停車場ていしやじょうのブリッジを、上のぼって、降おりて、そうしてそれが線路せんろをまたぎ越こえるために造つくられたものだという事ことには全然ぜんぜん気づかず、ただそれは停車場ていしやじょうの構内こうないを外国がいこくの遊ゆう戯ぎ場じょうみたいに、複雑ふくざつに楽たのしく、ハイカラにするためにのみ、設備せつびせられてあるものだとばかり思おもっていました。しかも、かなり永ながい間あいだそう思おもっていたのです。ブリッジの上のぼり降おりたりは、自分じぶんにはむしろ、ずいぶん垢あか抜ぬけのした遊ゆう戯ぎで、それは鉄道てつどうのサーヴィスの中なかでも、最もも気きのきいたサーヴィスの一ひとだと思おもっていたのですが、のちにそれはただ旅客りやかくが線路せんろをまたぎ越こえるための頗すこぶる実利じつり的な階き段だんに過すぎないのを発見はっけんして、にわかきように興きが覚さめました。

また、自分じぶんは子供こどもの頃ころ、絵本えほんで地下鉄ちかてつ道どうというものを見て、これもやはり、実利じつり的な必要ひつようから案出あんしゅつせられたものではなく、地上ちじょうの車くるまに乗のるよりは、地下ちかの車くるまに乗のったほうふうが風ふうがわりで面白おもしろい遊あそびだから、とばかり思おもっていました。

## 第一手記

我一直在打發著多羞多恥的生涯。

我於所謂的人的生活，是不甚了然的。我出生於東北鄉間，初次見到火車，是已經長到很大以後的事了。我在火車站的天橋上爬上爬下，居然不曾覺察到這是為了不跨越鐵軌而建造的，一心以為僅僅是為了使火車站變得如同外國的遊樂場一樣複雜而充滿樂趣，時髦且摩登而配備的。並且在相當長的一個時期一直以為如此。沿著天橋爬上爬下，於我而言，毋寧說是時髦而新奇的遊戲，覺得這是鐵路服務中最为別致巧妙的服務項目之一了。後來發現這不過是用來方便旅客跨越鐵軌的、十足功利的階梯而已，頓時感到掃興至極。

再者，我在孩提時代，曾在畫冊上見過地下鐵道，也同樣一心以為這是出於比起地面上的車輛來，乘坐地底下的車輛是更為別具一格的遊戲的緣故，不知道這其實是出於功利的需要。

自分は子供の頃から病弱で、よく寝込みましたが、寝ながら、敷布、枕のカヴァ、掛蒲団のカヴァを、つくづく、つまらない装飾だと思い、それが案外に実用品だった事を、二十歳ちかくなってわかって、人間のつましさに暗然とし、悲しい思いをしました。

また、自分は、空腹という事を知りませんでした。いや、それは、自分が衣食住に困らない家に育ったという意味ではなく、そんな馬鹿な意味ではなく、自分には「空腹」という感覚はどんなものだか、さっぱりわからなかったのです。へんな言いかたですが、おなかが空いていても、自分でそれに気がつかないのです。小学校、中学校、自分が学校から帰って来ると、周囲の人たちが、それ、おなかが空いたろう、自分たちにも覚えがある、学校から帰って来た時の空腹は全くひどいからな、甘納豆はどう？ カステラも、パンもあるよ、などと一言で騒ぎますので、自分は持ち前のおべっか精神を発揮して、おなかが空いた、とつぶやいて、甘納豆を十粒ばかり口にほうり込むのですが、空腹感とは、どんなものだか、ちっともわかっていやしなかったのです。

自分だって、それは勿論、大いにものを食べますが、しかし、空腹感から、ものを食べた記憶は、ほとんどありません。めずらしいと思われたものを食べます。豪華と思われたものを食べます。また、よそへ行って出されたものも、無理をしてまで、たいい食べます。そうして、子供の頃

從孩提時代起我就體弱多病，常常臥病不起。躺在床上，我深深感到床單、枕套、被套都是無聊的裝飾品。到了近二十歲時，才明白了這些東西竟是意外地實用，不由得黯然於人類的清寒，悲從中來。

此外，我不知道何謂飢餓。我的意思並不是要說明自己生長於不受衣食困擾的家庭，絕非那種無聊的意思。而是說我完全不理解「飢餓」這種感覺究竟為何物。這說法也許很奇怪——即使飢腸轆轆，我也毫無知覺。小學、中學時代，我放學回到家裡，周圍的人便會喧嚷不休：「喏，肚子餓了吧？還記得從前我們放學回家時，肚子那個餓啊，真夠嗆，來點糖豆如何？還有蛋糕、麵包噢！」我便發揮自己與生俱來的阿諛精神，唧噥道：「我餓啦。」將十來粒糖豆扔進嘴巴。其實，我根本沒弄明白何謂飢餓。

當然我也是要盡情吃喝的。但是因為感到飢餓而吞嚥食物的記憶，我卻幾乎沒有。我吃那些我覺得稀罕的東西，吃那些我覺得豪華的東西。再有，外出做客時，主人端出來的東西，也大體要吃的，哪怕是硬著頭皮填塞。對我來說孩提時代最痛苦的時刻，無疑便是家中用膳的時間。

自分のために、最も苦痛な時刻は、実に、自分の家の食事の時間でした。

自分の田舎の家では、十人くらいの家族全部、めいめいのお膳を二列に向い合せに並べて、末っ子の自分は、もちろん一ばん下の座でしたが、その食事の部屋は薄暗く、昼ごはんの時など、十幾人の家族が、ただ黙々としてめしを食っているありさまには、自分はいつも肌寒い思いをしました。それに田舎の昔気質の家でしたので、おかずも、たいていきまわっていて、めずらしいもの、豪華なもの、そんなものは望むべくもなかったもので、いよいよ自分は食事の時刻を恐怖しました。自分はその薄暗い部屋の末席に、寒さががたがた震える思いで口にごはんを少量ずつ運び、押し込み、人間は、どうして一日に三度々々ごはんを食べるのだろう、実にみな厳粛な顔をして食べている、これも一種の儀式のようなもので、家族が日に三度々々、時刻をきめて薄暗い一部屋に集り、お膳を順序正しく並べ、食べたくなくても無言でごはんを噛みながら、うつむき、家中にうごめいている霊たちに祈るためのものかも知れない、とさえ考えた事があるくらいでした。

めしを食べなければ死ぬ、という言葉は、自分の耳には、ただイヤなおどかしとしか聞えませんでした。その迷信は、(いまでも自分には、何だか迷信のように思われてならないのですが)しかし、いつも自分に不安と恐怖を与えました。人間は、めしを食べなければ死ぬから、そのために働いて、

我在鄉間的家庭中，全體成員共十來個人，每人的食案排成兩列對面相向，我是最小的孩子，理所當然坐在最下首，餐廳光線微暗，面對午餐時十幾位家族成員默默無言埋頭吃飯的場景，我總會感到不寒而慄。加之這是一個老派的家庭，菜餚大體都是固定不變的，稀罕的東西、豪華的東西之類，是毋庸奢望的。因此我越發對就餐的時刻感到恐怖。我瑟縮於這昏暗的房間的末席，彷彿不勝寒冷地打著哆嗦，撮起少許飯食運往唇側，塞入口中，一邊滿腦子胡思亂想：「人類為何要一日三餐地吃飯呢？」表情嚴肅異常地進食，似乎這是一種儀式，全家一日三次規定好時辰聚集於昏暗的一室，秩序森嚴地排列好飯食，縱然食慾全無也得默默無言地咀嚼吞嚥。也許是為了向遊蕩於家中的先靈俯首祈禱亦未可知。

不吃飯會死的，這句話在我的耳中聽來，無非是討厭的威脅而已。然而這種迷信（無奈至今在我聽來，這句話不知為何依然還像是迷信）始終給予我不安與恐怖。人因為不吃飯就得死，所以才不得不幹活掙口飯吃，對我來說，再沒有比這更晦澀難解，並讓人感受到脅迫意味的話了。

めしを食べなければならぬ、という言葉ほど自分にとって  
 難解で晦渋で、そうして脅迫めいた響きを感じさせる言葉  
 は、無かったです。

つまり自分には、人間の営みというものが未だに何も  
 わかっていない、という事になりそうです。自分の幸福の  
 観念と、世のすべての人たちの幸福の観念とが、まるで食  
 いちがっているような不安、自分はその不安のために夜々、  
 転輾し、呻吟し、発狂しかけた事さえあります。自分は、いっ  
 たい幸福なのでしょう。自分は小さい時から、実にしば  
 しば、仕合せ者だと人に言われて来ましたが、自分ではい  
 つも地獄の思いで、かえって、自分を仕合せ者だと言った  
 ひとたちのほうが、比較にも何もならぬくらいずっとずつ  
 と安楽なように自分には見えるのです。

自分には、禍いのかたまりが十個あって、その中の一  
 個でも、隣人が脊負ったら、その一個だけでも充分に隣人  
 の生命取りになるのではあるまいかと、思った事さえあり  
 ました。

つまり、わからないのです。隣人の苦しみの性質、程度が、  
 まるで見当つかないのです。プラクテカルな苦しみに、ただ、  
 めしを食べたらそれで解決できる苦しみに、しかし、それこ  
 そ最も強い苦痛で、自分の例の十個の禍いなど、吹っ飛  
 んでしまう程の、凄惨な阿鼻地獄なのかも知れない、それ  
 は、わからない、しかし、それにしては、よく自殺もせず、  
 発狂もせず、政党を論じ、絶望せず、屈せず生活のたたか

亦即是說，我對於人類的營生，至今仍然一無所知。感到自己的幸福觀似乎與世間所有人們的幸福觀截然不同時的不安。為了這不安，我夜夜輾轉反側、呻吟，甚至幾乎發狂。我究竟是否幸福？從小至今，總有人說我是幸福的人，而我自己卻彷彿生活在地獄裡一般，反而覺得說我幸福的人，他們自己才無與倫比地幸福安樂。

我甚至想過，在我身上隱藏有十個禍祟，哪怕鄰人背負起其中的一個，這一個恐怕也足以致人於死命。

亦即是說，我了無所知。鄰人痛苦的性質、程度，我渾然不解。那種實在的痛苦，那種只要有飯吃便可迎刃而解的痛苦，然而唯此才是最為強烈的痛苦，或許還將我那十個禍祟之類颺到十萬八千里開外，是悽慘絕倫的阿鼻地獄，我不清楚。然而即便如此，居然既不自殺，也不發瘋，還要談論政黨，不絕望不屈服地繼續著生活的戰鬥。這難道不是毫不痛苦嗎？難道不是徹底變成利己主義者，還堅信唯此才是天經地義而從

いをつけて行ける、苦しくないんじゃないか？ エゴイストになりきって、しかもそれを当然の事と確信し、いちども自分を疑った事が無いんじゃないか？ それなら、楽だし、しかし、人間というものは、皆そんなもので、またそれで満点なのではないかしら、わからない、……夜はぐっすり眠り、朝は爽快なのかしら、どんな夢を見ているのだろう、道を歩きながら何を考えているのだろう、金？まさか、それだけでも無いだろう、人間は、めしを食うために生きているのだ、という説は聞いた事があるような気がするけれども、金のために生きている、という言葉は、耳にした事が無い、いや、しかし、ことに依ると、……いや、それもわからない、……考えれば考えるほど、自分には、わからなくなり、自分ひとり全く変っているような、不安と恐怖に襲われるばかりなのです。自分は隣人と、ほとんど会話が出来ません。何を、どう言ったらいいのか、わからないのです。

そこで考え出したのは、道化でした。

それは、自分の、人間に対する最後の求愛でした。自分は、人間を極度に恐れているながら、それでいて、人間を、どうしても思い切れなかったらしいのです。そうして自分は、この道化の一線ですでに人間につながる事が出来たのです。おもてでは、絶えず笑顔をつくりながらも、内心は必死の、それこそ千番に一番の兼ね合いとでもいうべき危機一髪、油汗流してのサービスでした。

不曾對自己稍加懷疑嗎？如果那樣，倒也輕鬆。然而舉世之人難道不是個個如此，而且非如此方為最佳嗎？我不清楚……夜晚酣睡一宿，早晨便神清氣爽嗎？做過甚麼夢？行走時在思考甚麼？金錢？總不至於僅僅如此吧？我彷彿聽說過人是為了吃飯而活著的學說，但卻不曾聽說過是為了金錢而活著。然而也許……不，這我也不清楚……越是思考，我就越加茫然。我與鄰人幾乎無法對話，我不知道該說些甚麼，如何說才好。

於是我想出來的，就是扮演小丑。

這是我取悅他人的最後一招。我似乎極度地畏懼人，同時又做不到徹底地否定人。於是我憑藉著扮演小丑這纖細的一條線與他人聯繫了起來。表面上始終如一強作歡顏，內心深處卻油汗淋漓死去活來，委實是以一髮而懸千鈞，難乎其難的苦差事。

自分は子供の頃から、自分の家族の者たちに対してさえ、彼等がどんなに苦しく、またどんな事を考えて生きているのか、まるでちっとも見当つかず、ただおそろしく、その気まずさに堪える事が出来ず、既に道化の上手になっていました。つまり、自分は、いつのまにやら、一言も本当の事を言わない子になっていたのです。

その頃の、家族たちと一緒にうつした写真などを見ると、他の者たちは皆まじめな顔をしているのに、自分ひとり、必ず奇妙に顔をゆがめて笑っているのです。これもまた、自分の幼く悲しい道化の一種でした。

また自分は、肉親たちに何か言われて、口応じた事はいちども有りませんでした。そのわずかなおこごとは、自分には霹靂の如く強く感ぜられ、狂うみたいになり、口応えどころか、そのおこごところ、謂わば万世一系の人間の「真理」とかいうものに違いない、自分にはその真理を行う力が無いのだから、もはや人間と一緒に住めないのではないかしら、と思いつ込んでしまうのでした。だから自分には、言い争いも自己弁解も出来ないのです。人から悪く言われると、いかにも、もつとも、自分がひどい思い違いをしているような気がして来て、いつもその攻撃を黙して受け、内心、狂うほどの恐怖を感じました。

それは誰でも、人から非難せられたり、怒られたりしいい気持がするものでは無いかも知れませんが、自分は怒っている人間の顔に、獅子よりも鱈よりも竜よりも、もつ

自孩提時代起，即便是對骨肉至親，我也全然不了解他們生活得何等痛楚，不了解他們在思考些甚麼。只是覺得可怖，覺得無法忍受那份不融洽，不知不覺之中早就成了高明的滑稽小丑。亦即是說，曾幾何時，我變成了從不說一句真話的孩子。

翻閱當時與家裡人一起拍的相片，只見其他人個個表情認真，唯獨我一人，必定是扭歪著面孔，滿臉堆笑。這也是我那幼稚可悲的插科打諢的一種。

還有，當我遭到父母兄長們責備時，我從未頂撞過他們。僅僅是一句小小的申斥，在我聽來就會如同雷霆霹靂一般強烈，幾至發狂，更不用說頂撞了。我甚至確信那申斥簡直就是萬世不移的人類真理，而我卻無力實施這真理，因此恐怕不配與人類同處於世。所以我既不能與人相爭，也無從自我辯解。每當別人惡語相加，我便覺得似乎是自己大錯特錯，總是默默地承受攻擊，內心恐怖得幾近發瘋。

也許無論何人，在受到非難遭到斥責時，都不會心情舒暢，而我則在憤怒者的臉上看出比獅子比鱷魚比毒龍更為可怖的動物本性。平時將這本性隱藏起來，一旦有了機會，好

とおそろしい動物の本性を見るのです。ふだんは、その本性をかくしているようですけれども、何かの機会に、たとえば、牛が草原でおとりした形で寝ていて、突如、尻尾でピシッと腹の蛇を打ち殺すみたいに、不意に人間のおそろしい正体を、怒りに依って暴露する様子を見て、自分はいつも髪の毛の逆立つほどの戦慄を覚え、この本性もまた人間の生きて行く資格の一つなのかも知れないと思えば、ほとんど自分に絶望を感じるのです。

人間に対して、いつも恐怖に震いおののき、また、人間としての自分の言動に、みじんも自信を持たず、そうして自分ひとりの懊悩は胸の中の小箱に秘め、その憂鬱、ナアヴァスネスを、ひたかくしに隠して、ひたすら無邪気の楽天性を装い、自分はお道化たお変人として、次第に完成されて行きました。

何でもいから、笑わせておればいいのだ、そうすると、人間たちは、自分が彼等の所謂「生活」の外にいても、あまりそれを気にしないのではないかしら、とにかく、彼等人間たちの目障りになってはいけな、自分は無だ、風だ、空だ、というような思いばかりが募り、自分はお道化に依って家族を笑わせ、また、家族よりも、もっと不可解でおそろしい下男や下女にまで、必死のお道化のサービスをしたのです。

自分は夏に、浴衣の下に赤い毛糸のセーターを着て廊下を歩き、家中の者を笑わせました。めったに笑わない長

比溫文爾雅地躺在草地上的牛，突如其來地狂甩尾巴打殺肚皮上的牛虻一般，會因為憤怒而意想不到地暴露出人類可怕的原形。看到這些，我便會毛髮倒豎戰慄不已，想到這本性或許也是人類賴以生存下去的資格之一，我甚至對自己感到了絕望。

對他人，我總是感到恐懼，恐懼得瑟瑟發抖。同時，對於自己作為人的一言一行，我亦無絲毫的自信，於是將自己個人的煩惱隱藏於心底，對自己的憂鬱、神經質，一個勁地遮遮掩掩，拚命偽裝出天真爛漫的樂天性格。作為一個專事逗笑取樂的丑角，我逐漸地完成了自己。

不管甚麼都可以，只要逗人發笑就行。這樣，即使我置身於人們所謂的「生活」之外，他們大概也不會介意。總之不能成為人們的眼中釘。我是無，是風，是空白。這類念頭愈演愈烈，我憑藉插科打諢讓家裡人發笑，甚至那些比自家親人更加不可理解的僕人侍女，我也不遺餘力地為他們提供科諢服務。

夏天，我在浴衣下面穿了件紅色羊毛絨線衫，在走廊上來走去，逗得全家大笑不已。連一貫不苟言笑的長兄，看見我

兄も、それを見て嘔き出し、

「それあ、葉ちゃん、似合わない」

と、可愛くてたまらないような口調で言いました。なに、自分だって、真夏に毛糸のセーターを着て歩くほど、いくら何でも、そんな暑さ寒さを知らぬお変人ではありません。姉の脚絆を両腕にはめて、浴衣の袖口から覗かせ、以ってセーターを着ているように見せかけていたのです。

自分の父は、東京に用事の多いひとでしたので、上野の桜木町に別荘を持っていて、月の大半は東京のその別荘で暮していました。そうして帰る時には家族の者たち、また親戚の者たちにまで、実におびたたくお土産を買って来るのが、まあ、父の趣味みたいなものでした。

いつかの父の上京の前夜、父は子供たちを客間に集め、こんど帰る時には、どんなお土産がいいか、一人々々に笑いながら尋ね、それに対する子供たちの答をいちいち手帖に書きとめるのでした。父が、こんなに子供たちと親しくするのは、めずらしい事でした。

「葉蔵は？」

と聞かれて、自分は、口ごもってしまいました。

何が欲しいと聞かれると、とたんに、何も欲しくなくなるのでした。どうでもいい、どうせ自分を楽しませてくれるものなんか無いんだという思いが、ちらと動くのです。と、同時に、人から与えられるものを、どんなに自分の好みに合わなくても、それを拒む事も出来ませんでした。イ

也忍俊不禁，口氣充滿了眷愛地說：

「阿葉，那，可不合時宜喲。」

得了吧您哪，再怎麼著，我也不至於傻到不知寒暑冷暖的地步，在盛夏炎日裡身著毛衣招搖過市。我不過將姐姐的毛線裹腿套在手腕上，從浴衣的袖口微微露出一圈，假裝身著毛衣的模樣罷了。

我的父親因為在東京有許多事務，在上野的櫻木町擁有一座別墅，每月的大半在東京那座別墅度過。每次回鄉時為家人和親友帶回許許多多的禮物，似乎是父親的樂趣。

一次，父親在進京的前夜，將孩子召集到客廳，笑著詢問每一個人，下次回來想要甚麼禮物，並將孩子的答覆一一記在手賬上。父親如此和孩子們親熱，是很少見的。

「葉藏，你呢？」

聽見父親的問話，我竟瞠目結舌，說不出話來。

當父親問我想要甚麼時，我突然覺得甚麼都不想要了。一個念頭倏地閃過——不拘甚麼都行，反正不會有甚麼東西能使我快樂。同時，別人送我的東西，哪怕與我的喜好相去萬里，我也無法拒絕。厭惡的事物都不能說厭惡，而喜愛的東西，又提心吊膽彷彿盜竊來的一般，從中品味出極度的苦來，

やな事を、イヤと言えず、また、好きな事も、おずおずと盗むように、極めてにがく味わい、そうして言い知れぬ恐怖感にもだえるのです。つまり、自分には、二者選一の力さえ無かったのです。これが、後年に到り、いよいよ自分の所謂「恥の多い生涯」の、重大な原因ともなる性癖の一つだったように思われます。

自分が黙って、もじもじしているので、父はちょっと不機嫌な顔になり、

「やはり、本か。浅草の仲店にお正月の獅子舞いのお獅子、子供がかぶって遊ぶのには手頃な大きさのが売っていたけど、欲しくないか」

欲しくないか、と言われると、もうダメなんです。お道化た返事も何も出来やしないんです。お道化役者は、完全に落第でした。

「本が、いいでしょう」

長兄は、まじめな顔をして言いました。

「そうか」

父は、興覚め顔に手帖に書きとめもせず、パチと手帖を閉じました。

何という失敗、自分は父を怒らせた、父の復讐は、きっと、おそるべきものに違いない、いまのうちに何とかして取りかえしのつかぬものか、とその夜、蒲団の中でがたがた震えながら考え、そっと起きて客間に行き、父が先刻、手帖をしまい込んだ筈の机の引き出しをあけて、手帖を

於是只有在無可理喻的恐怖感中痛苦地掙扎。就是說，我甚至連兩者擇一的能力都不具備。這一毛病到了多年以後，漸漸成為我那所謂的「多羞多恥」生涯的重大原因之一。

因為我沉默不語躊躇不決，父親臉上露出一絲不悅，說：

「那麼還是要書嘍？淺草寺前的商店裡有賣正月舞獅子用的獅子面具，也有專給小孩子戴著玩的，想不想要？」

不問猶可，一旦問我想不想要，我便傻眼了。因為再也無法插科打諢敷衍過去。丑角演員徹底破產。

「大概還是要書吧？」長兄表情嚴肅地說。

「是嗎？」父親似乎頗為掃興，也不再做記錄，啪地合上手賬。

這下完了，惹惱父親啦，父親的復仇一定十分可怕，眼下可有甚麼辦法補救呢？那天晚上，我在被窩裡一面哆哆嗦嗦顫抖不已，一面思索。我悄悄地起身走進客廳，打開父親收有手賬的抽屜，取出手賬，嘩啦嘩啦地亂翻，找到記錄禮品清單的一頁，舔濕手賬上的鉛筆，寫上了「獅子面具」，然後回去

と あ みやげ ちゅうもん きにゅう かしょ  
 取り上げ、パラパラめくって、お土産の注文記入の個所  
 を見つけ、手帖の鉛筆をなめて、シシマイ、と書いて寝ま  
 した。自分はその獅子舞いのお獅子を、ちっとも欲しくは  
 無かったのです。かえって、本のほうがいいくらいでした。  
 けれども、自分は、父がそのお獅子を自分に買って与えた  
 いのだという事に気がつき、父のその意向に迎合して、父  
 の機嫌を直したいばかりに、深夜、客間に忍び込むという  
 冒険を、敢えておかしたのでした。

そうして、この自分の非常の手段は、果して思いどお  
 りの大成功を以て報いられました。やがて、父は東京から  
 帰って来て、母に大声で言っているのを、自分は子供部屋  
 で聞いていました。

「仲店のおもちゃ屋で、この手帖を開いてみたら、これ、  
 ここに、シシマイ、と書いてある。これは、私の字ではない。  
 はてな？と首をかしげて、思い当りました。これは、葉蔵  
 のいたずらですよ。あいつは、私が聞いた時には、にやに  
 やして黙っていたが、あとで、どうしてもお獅子が欲しく  
 てたまらなくなっただね。何せ、どうも、あれは、変っ  
 た坊主ですからね。知らん振りして、ちゃんと書いている。  
 そんなに欲しかったのなら、そう言えばよいのに。私は、  
 おもちゃ屋の店先で笑いましたよ。葉蔵を早くここへ呼び  
 なさい」

また一方、自分は、下男や下女たちを洋室に集めて、下  
 男のひとりに滅茶苦茶にピアノのキイをたたかせ、(田舎で

睡覺。其實我根本不想要那獅子面具，毋寧說書似乎更合適。然而我覺察到了父親想給我買獅子面具，一心想迎合父親的意願，挽回父親的歡心，這才巴巴兒地做出深夜潛入客廳的冒險舉動來。

我這非常手段果然獲得了我所設想的極大成功。未幾，父親從東京歸來，我聽見他大聲對母親說：

「我在淺草寺前的面具店裡打開這本手賬一看，咦，這不，上面寫著『獅子面具』。分明不是我的字跡。怎麼回事？我正納悶，一下子想起來了，這是葉藏的鬼把戲。那小子在我問他時，笑嘻嘻地一聲不響，過後又想要獅子面具想得不行啦。反正那孩子怪得很。假裝若無其事，其實早就偷偷寫好了。既然那麼想要，直說不就得啦。我站在玩具店門前笑了起來。快把葉藏叫來。」

另一方面，我也曾將男僕女傭們召集到西式房間，讓一名男僕胡亂地敲擊鋼琴（雖然是鄉下，這個家庭裡大體的東西倒

## 作者簡介

### 太宰治

1909—1948，本名津島修治，與川端康成、三島由紀夫並駕齊驅的戰後日本文學巨匠。短短 39 年的生涯中，留下了 140 部作品。代表作有《女生徒》《斜陽》《跑吧！梅洛斯》《如是我聞》《人間失格》等，其中，《人間失格》創下了發行人數 1000 萬冊的紀錄。

太宰治出生豪門、才華橫溢，但他總感到自身罪孽深重。「罪多者，其愛亦深。」太宰治認為，只有體會到自身罪孽深重的人，才能體會到愛的真諦。而作者在完成《人間失格》的當年，便自殺離世。

## 譯者簡介

### 施小煒

畢業於復旦大學外文系日本語言文學專業，畢業後留校任教。後留學於日本早稻田大學大學院日本文學研究科，並執教於日本大學文理學部。

主要譯著有村上春樹《當我談跑步時我談些甚麼》《1Q84》《天黑以後》《沒有色彩的多崎作和他的巡禮之年》等作品的簡體中文版，以及川上弘美《老師的提包》簡體中文版等多部譯著。